



浮遊学園の

# アリス&シャリ

# 2

*Alice and Shirley*

むらさきゆきや

illustration by  
しらび



むらさきゆきや

illustration by しらび

# 2

浮遊学園の

*Alice and Shirley*

# アリス&シャリ

OVERLAP

プロローグ	いつもの朝……………	006
第1章	幻想禁止装置……………	015
第2章	笑顔のないカフェ……………	061
第3章	規律委員会の仕事……………	094
第4章	氷梨の戦い……………	125
第5章	魔法使いの塔……………	170
エピローグ	お菓子日和……………	237

Presented by  
Yukiya Murasaki  
Illustration by  
Shirabii

## 前回のあらすじ

浮遊学園都市《楽園》——高度千メートルに浮かんでいる巨大な街。  
この一般社会から隔離された場所に、特有幻想という異能に覚醒した幻想具現者たちが集められて暮らしている。

楠木柢貴は、お菓子作りが趣味の平和で平凡な高校生だったのに、最高位のレベル7と判定され、《楽園》に転校することになってしまった。

初めて訪れた学園都市で、柢貴は七年前に転校していった幼馴染み——桜坂シャーリーと再会する。

すっかり大人びた体つきに成長した彼女が、小学生の頃と変わらず恥じらいのないスキンシップをしてくるものだから、思わずたじろいでしまう柢貴だったが、

シャーリーはシンプル思考で自分が正しいと思ったことは絶対に貫くという性格だ。その気性ゆえか、特有幻想《スターブラスト》は拳から絶大な破壊力のある閃光が放たれるというもの。こちらも学園最強のレベル7と評価されていた。

ここ《楽園》では、レベルが高い者ほど優遇され、偉いという風潮がある。しかし、シャーリーは言い放つのだ。

「クラス分けがレベル順だったりして、みんな大事そうに言うけど……あたしは、どうでもいいと思うんだ！——だって、使える食堂は同じだもん！」



柢貴は転校早々、事件に巻きこまれてしまう。

なにやら常軌を逸した様子の幻想具現者に殺されかけ、空き教室へと追い詰められた。

天井を碎いて落ちてきたのは、トランプの兵隊と、帽子をかぶったネズミと、カモとインコとカニと子ガニと、巨大な猫と……

そして、お人形のように可愛らしい少女だった。

名をアリス・クロックハートといい、柢貴やシャーリーと同じくレベル7の幻想具現者らしい。摩訶不思議な存在たちは、アリスの特有幻想《妖精進撃》によるものだった。

ただし、彼女は性格に問題を抱えており――

「……この世界の王は、わたしですから……頂の見えぬ無知蒙昧な者どもは、強い力を全てレベル7として扱いますが、だからといって、わたしと並び立てると勘違いした進化などは疎ましく目障りです」

アリスとシャーリーは学園の治安維持を支える規律委員会に所属する二人一組のチーム《お助け猫》なのだが……意見の衝突からパートナーを解消中。

柢貴はよくわからないうちに、アリスの新しいパートナーになってしまったのだった。

レベルによって決まるクラス分けてで、柢貴はA組に所属することになった。

そのA組の悪童――威昌沼という男子が、環端末の怪しげなアプリケーションを使う。

輪端末とは《楽園》居住者の生活を支援する携帯装置で、通信通話各種ナビゲーションから脳波や心拍数の計測や、身体へ干渉しての簡易的な医療機能まで備えていた。

違法なAPPDを使用した威昌沼は、一時的にレベルアップして、柢貴たちに暴虐を働こうとする。なんとか気絶させるが、副作用により昏睡状態に陥ってしまったのだった。

APPDを調査した柢貴たちは――A組の担任教師である梁谷先生が提供者であることを突きとめる。追及された梁谷は、自らAPPDを使い、より強力な特有幻想を得る。

さらに、アリスとシャーリーの苦手な場所へと誘いこむことで、彼女たちを追い詰めるのだが……

柢貴は特有幻想《蔷薇園》を発動させ、強引に戦いの場を移す。形勢は逆転！シャーリーが渾身の一撃で、梁谷をぶっ飛ばすのだった。





## いつもの朝



七月になって、早朝でも陽差しの強さを感じるようになった。

けれども、最新の空調システムを備えるマンションは、まるで秋春のように過ごしやすい。キッチン周りも適切な温度湿度に保たれていた。

楠木柩貴は波動調理窯の扉を開き、トレイを引っ張り出す。

ほわん、と広がるのは、焼けたチーズとトマトソースからの鼻孔をくすぐる湯気だった。スパゲッティ・ポロネーゼのうえに、たっぷりチーズをかけて、石窯焼きにした料理だ。とろっ、とした食感とパリッとした歯ごたえの両方が楽しめ、夏バテ気味の朝でも食欲を呼び覚ますほど香ばしい。

「うん、上出来だな」

仕上がり具合に、柩貴はうなずいた。

かすかな金属音を鳴らして、ダイニングのドアが開かれる。

ふあさ、と黄金を溶かしたような金髪をかきあげ、小さな女の子が入ってきた。

背丈は柩貴の胸元くらいしかなく、手足も胴体も細くて華奢でお人形のような容姿をしているけれども、彼女は柩貴と同じ高校二年生で、同じクラスに属している。

青色のドレスみたいな服を身に纏っていた。袖口やスカートの裾などに花が開いたようなフリルがあしらわれている。学園の規則にある制服ではないが、一分の隙もない格好だった。

柩貴はキッチンから、カウンター越しに声をかける。

「やあ、おはよう、アリス」

「……………ん」

挨拶にうなずきを返すだけ。それでも、朝の彼女にしてはすこぶる機嫌がいい。

名前はアリス・クロックハート——この部屋の主だ。

涼しげな青い瞳で、柩貴のことを一瞥してくる。

「……………まるで妖精です」

「え？」

「……………わたしが寝てる間に家事をやっていますから」

「ははは……………はくは料理しかやらないけどね。今日もキッチンを使わせてもらってるよ。

ほとくの部屋の簡易コンロとは雲泥の差だ。とくに波動調理窯はすごいな、コンロにもレンジにも石窯にもなるなんて」

料理のことになると、つい饒舌になってしまう。

アリスが話を受け流し。

「……………柩貴くんは、今朝も早いのですね」

「食べてもらえないなら、早起きして来てる甲斐があるというものだよ」  
 柗貫は苦笑しながら作りたての料理をテーブルに出した。

アリスがダイニングのイスに腰掛ける。

「……何時に起きたのですか？」

「えっと、ちょっと仕込みがあったから、四時くらいかな。この部屋には五時に来たんだ」

柗に立ててあるウサギのヌイグルミが持つアナログ時計は、六時を告げていた。

今日は平日なので、七時には登校しないといけない。

アリスが肩をすくめた。

「……六時に起きる者も少なくありませんのに」

「そうだね。でも料理に凝るなら朝が早くなるのは仕方ないよ。好きでやっつてることだから苦ではないし」

ティーポットから、カップに紅茶を注いだ。

食卓を彩る薄紅色の液体。

アリスが左手でカップを持ちあげる。そっと唇を濡らした。

「……ん……悪くありません」

「よかった」

「……前から言っていることですが」

「うん？」

「……部屋なら余っています」

「ああ、前から聞いてるな」

アリスは三十階建てのマンションを丸ごと所有している。いつも使っているのは最上階の部屋だ。

ときどき同居人とのケンカ——というか、じゃれ合いで部屋を壊してしまうが……それでも、たった二人で全て使い切れるはずもなく、下のほうの階は手つかずで放置されている。

その空き部屋を貸してくれるという話だったが……

クラスメイトの女の子に部屋を間借りするということに、恥ずかしさを感じてしまい、柗貫は遠慮し続けているのだった。

アリスは元々口数が少ない。すぐに話題も尽きて、互いに無言のまま静かな朝食となる。けれども、沈黙に息苦しさはなく、むしろ心地のいい静寂といえた。

ティーカップをソーサーに置く音。

シーザーサラダのレタスにフォークが刺さる音。

お互いの存在が感じられる程度のささやかな。

ダン！ と荒々しくドアが開けられた。

猫が雨に降られたような声をあげ、もう一人の少女が部屋へと入ってくる。

「うあー、暑ういー」

シャーリーだった。

彼女はアリスと同居している。

しかし、朝から一分の隙もなく身支度して現れたアリスとは対照的に、シャーリーのほうは、あられもない格好をしていた。

胸元も脇も甘いゆるめのTシャツには、でかかど どうぶつ と書いてある。いや、Tシャツの柄のセンスについては、今は置いておこう。

その薄い布一枚は、羞恥心や慎みを置き去りにして育ちまくった身体を包むのに、あまりに力不足だった。

たゆゆん、とした胸元の張り出しの形は露になり、その先端は、つんと尖ってしまった

いる。  
柎貴は視線をキツチンのほうへ逸らした。

「ええっと……シャーリーのおんも、すぐ作るからな」

「ありがとお、柎貴い、あと、水もお」

「うん」

彼女を見ないようにしつつ、コップに冷水を注いでカウンターに置いた。

アリスが苛立ちを滲ませた声で。



「……どうして、シャーリーは空調を止めるのですか。夏なのですよ？」

「にははっ、夏なんだから暑くて当然じゃん」

「……暑いから冷房があるのです」

「あたし、クーラーって苦手なんだよね。やっぱり、夏は汗かかないと！ 起きたときに汗だくなのがいいんじゃない」

「……理解不能ですが、個人の趣味として許容しましょう……けれども、どうしても、どうしても、そのような格好でダイニングに出てくるのですか」

「ん？ 普通のTシャツと短パンだよ？」

「……せめて下着をつけるべきです。そして、下着の見えない衣服を身に着けるのが、最低限の身だしなみ……いえ、文明人としての下限と言ってもいいです」

「にははっ、ブラってキツくて。新しいの買ってもすぐ縮んじやうんだよねえ」

それは下着が縮んでるのではなくシャーリーのほうが育っているのでは？ と柎貴は思ったが、賢明なる沈黙を守った。

ぐっ、とアリスの負のオーラが強くなる。

「……キツイとかゆるいとか、大きいとか小さいとか……そういうことを言ってるのではないのです」

柎貴は出来上がったシャーリーのぶんのスパゲッティを持って行き、テーブルのうえで止めた。

「自宅とはいえ、同居人の気持ちも大切にしないとダメだぞ」

「わあ、美味しそう！」

「ちゃんとアリスの意見も聞くよな、シャーリー？」

皿を降ろすことなく、そう尋ねると、ぶんぶんと彼女は何度もうなずいた。とても素直だ。

子供の頃からシャーリーに話をするときは、これが一番だった。アリスが慥然として言う。

「……下着くらいは着けるべきです」

「わかったつてば。あっ、でも、ちゃんとパンツは穿いているよ？」

ズボンをつまんで。しゆる、と衣擦れの音がした。

——なぜ降ろした!？」

「あ、暑くて脱いだんだった」

「……ッ!？」

アリスが椅子を蹴って立ちあがる。

そして、スカートの隠しポケットからトランプを取り出した。

「くっ……あなたに品性と知性を教育してあげます、このお猿っ！」  
 「お、お猿う!? ちょっと失敗しただけじゃん。寝起きならよくあることだよ！」  
 「ですから、そうしたアクシデントを絶対に起こさないよう徹底的に教育……いいえ……調教してあげます」

ぱんっ、と柎貴は手を叩く。

「今日はH Rの前に、規律委員会本部で偉い人と会うんだろ? 早く食べないと遅刻しちゃうぞ」

「はいい!」

席についたシャーリーが、もりもり食べはじめた。

テーブルの向かい側にアリスも座った。

「……………まったく」

「ほら、アイスティーも作ったよ」

柎貴は紅茶を注いでからアリスに腰を降ろす。すこし賑やかになって、いつもの朝食の風景になった。



## 幻想禁止装置



浮遊学園都市《楽園》の中央には、管理塔がある。そこから幹線道路が放射状に広がっており、円形の環状線が繋いで、蜘蛛の巣のような形になっていた。その幹線のひとつを走る通学バスに揺られること十五分、柎貴たちは《第十三校舎》へ着いた。

階段状に広がる下層部に正面玄関がある。ガラス張りの六十階建てのビルだった。柎貴の常識からすると、巨大なオフィスビルにしか見えないが……これ全体が校舎であり、三十クラス三学年で三千人近い生徒が通っている。

それでも《楽園》全体のごく一部でしかなく、この浮遊都市には、他にも校舎があるわけだが。

大勢の制服姿の生徒たちが、校舎へと向かう。

柎貴たちも玄関をくぐり、やたらと広い通路を抜け、広大なホールに出た。

中央に円形の柱というか、曲線を描く壁がある。エレベーターピラーと呼ばれ、曲面の壁にエレベーターがいくつも並んでいた。

そのひとつに乗って、みんなとは逆に校舎の地下へと降りる。

規律委員会本部は地下にあった。環境端末から個人を識別し、自動的に鉄扉が開く。

近代的な設備のなかに、古めかしい部屋があった。土壁に畳敷きの純和風。旅館のような造りだ。

規律委員会の顧問という重責を担っている緑川先生が、ちゃぶ台に肘をついてお菓子をかじりながらTVを見ている。

彼女の外見は子供のように幼く、いつもジャージ姿なせいもあり、威厳もなにもあったものではなかった。

それでも、柎貴は丁寧に挨拶する。

「失礼します」

「おう、待ってたぞ」

「おはよ、みっちゃん先生！」

「緑川先生と呼べって言ってるんだろ、桜坂。おはようさん」

「……相変わらず居心地の悪い部屋です……椅子もないなんて」

「クロックハート、挨拶ぐらいしろっての」

口は悪いが、先生というより先輩といった感じで、生徒たちから親しみを持たれていたシャーリーが入口のところで靴を脱ぐと、四つん這いになって、ちゃぶ台まで犬猫みた

いに駆けていく。

「みっちゃん、なに食べてるの!？」

「うおっ、這い寄ってきた!？」 なにって……オレオだよ。言っとくけど、これは自腹だからな。規律委員会の予算で買ったもんじゃないから、全部アタシのぞ」

「いっこもらい！」

「てめえ、この、てめえ！」

朝食は十分に食べたはずなのに、お菓子は別腹か。

アリスが目をすがる。

「……あれだけ食べて、よく入るものです」

「まったくだね。普通なら太りそうなものだけど、運動してるせいかな？」

「……さて、栄養がどこへいつているやら……頭に回っていないことだけは確実です」

「おいおい」

親友のわりに容赦のないアリスだった。

もっとも、彼女が人に関心を示すことが、そもそも珍しいのだが。

扉が開く――

そういえば、今日は規律委員会の偉い人が来るという話だった。

アリスが横目で視線を走らせる。

柎貴は遅れて気付いて、そちらを向いた。

現れたのは、青年で……  
背は低いものの鋭い目つきのせいで威圧的な印象がある。黒髪をオールバックにしており、細面で、隙がない男だった。

——どこかで見たことがあるような？

つい、まじまじと見てしまった。

目が合う。

その男が口を開く。

「塩気の足りなさそうな顔したやつだな。新顔か？」

「え、あ、ぼくは……」

榎貴が戸惑っている、アリスが冷たい声で言い返す。

「……楠木榎貴くんは、わたしのパートナーです。なにか文句でも？」

「ん？　なんだ、お前も来てたのかよ。相変わらずゴマみたいに小さいな、ちゃんと飯を食ってるか？」

「……あなたに身長について揶揄される覚えはありません。鏡を出して差し上げましょうか」

「元氣そうだな。あっちも」

彼が視線を向けた先——

畳敷きの部屋の中央では、二枚目のお菓子を取られた緑川先生が、もしやもしやと食べてるシャーリーに飛びかかって、「てめえ、この、アタシのオレオはココか!?　ココに

いってんのか!」  
「くすぐった!　だめ、センサー、もんじゃだめえ」とかやっている。

男が靴を脱いで畳にあがった。

「お前たちは、そこで立ち見なのか？」

「あ、いえ」

榎貴も座敷へあがる。

アリスが不満そうにしつつ、靴紐を緩めはじめた。オシャレとは手間がかかるものだ。

男が畳のうえに適当に座りこむ。

「さて、前菜はなしだ。さっそく始めるとしよう」

「えっ……あの、あれを止めなくていいんですか？」

シャーリーと緑川先生のほうに視線を向けた。

彼は肩をすくめて。

「俺は何かと忙しいんでな」

「はあ……」

「馬鹿じゃないんだから、必要な話くらいは聞くだろ」

ようやく、シャーリーたちが、じゃれ合いをやめて、ちゃんと座り直した。緑川先生が外れかけたヘアバンドを整えながら。

「やっと登校してきやがった、この素行不良委員長め！」

「早いとこ解任してくれりゃいいのにな」

「楠木は会うの初めてだったよな？ こいつは、須旺<sup>すおう</sup>礼時<sup>れいじ</sup>。三年で、規律委員会<sup>フレイカ</sup>の委員長をやってる。こんなんだけど、お前らと同じレベル7だぞ」

「委員長といっても、前の委員長が指名してきただけで、はつきり言って面倒なだけなんだが」

柩貴は記憶をたぐり寄せる。

昔、雑誌で見たことがあった。

「須旺……須旺礼時さん……もしかして、洋菓子を作るんじゃないかもしれませんか？」

ああ、と彼はうなずく。

「男が菓子作りなんていうと笑うヤツもいるが」

「いえ、そんな！」

三年前――

柩貴は彼の名前を知る機会があった。そのときの写真のなかの須旺は、もっと明るくて快活な笑顔を浮かべていたが。

今は、抜き身の刃物のような近寄りたがいの雰囲気があった。

「そんなことより……」

須旺が話題を戻す。

シャーリーのほうへと目を向けた。

「桜坂、今日、どうして呼ばれたのか、わかってるか？」



「えっと……はりー先生をブツ飛ばしたから」

「近いけどな」

「惜しい！」

「クイズやってんじゃないやねえんだ。今から、一度だけ説明してやるから、しつかり覚えろ」

「にやー」<sup>プ</sup>

「お前が規律委員会のルールを破って、支援隊にもかかわらず特有幻想をばんばん使ったことが問題になってる」

「ああ、うん」

学園の治安を守るための組織——規律委員会。警察と協力して、治安を乱す幻想具現者を取り締まっている。

委員には二人一組というルールがあり、パートナー不在の場合は、支援隊という扱いになる。

支援隊は特有幻想が戦闘向きじゃない者や、レベルが低すぎて戦力になれない者が多く、違反者の捜索や後片付けなどを手伝うのが主な役目だ。

そういう仕事も必要なこと、と柎貴は思っているが、アリスなどは下働きだと考えていたり、人それぞれだ。

支援隊は違反者を見つけても、報告と監視だけが求められ、特有幻想を使って捕縛してはならないというルールがあった。

言い換えれば——生徒が自己判断で特有幻想を使うことを許されているのが規律委員で、それは特別なことで、二人一組でなければならぬ——ということだ。

ずっとアリスとシャーリーはパートナーを組んでおり、規律委員だった。

ところが、ささいな口論から二人はチームを解散。アリスが柎貴とパートナーの契約をしまったために、シャーリーは支援隊扱いになっている。

にもかかわらず、彼女は特有幻想で戦いまくってしまった。

柎貴は身を乗り出す。「待ってください！ たしかに、ルール違反はありました。けれど、あれは正当防衛じゃないでしょうか!？」

「たしかに、桜坂が置かれた状況は、生命の危機を感じられるものだった。大怪我したという診断もあるしな。戦いに自発的に参加したことは問題だが、窮地の仲間を助けに行っただけを批判する者はいないだろう」

シャーリーは梁谷との戦いで、常人なら死んでもおかしくないような大怪我をしていた。もしも、ルールを守って特有幻想を使わなかったら、どうなっていたか。

「それじゃ……」

「今回は情状酌量の余地ありとして——幻想禁止装置による幻想具現化の停止措置とする。授業の時間は解除されるがな。処分期間は一年だ」

「長ッ!」

シャーリーが唇を尖らせた。  
須旺がうなずく。

「厳しい処分だ。それも当然だろう。規律委員会プレイカイは生徒たちの手本となる立場……身内の処分が甘い組織など、誰が信用するものか」

こればかりは柗貴も反論できなかった。  
緑川先生が補足する。

「新しいパートナーと契約して規律委員プレイカイに復帰したら、幻想禁止装置は解除されるぞ？  
もちろん、違反者に対して特有幻想ディイアレククトを使うのも許されるしな」

シャーリーが表情を明るくした。

「ほんと!? じゃあ、柗貴がパートナーになってくれれば、ぜんぶ解決だね!」

「えっ、ぼくが?」

柗貴は思わず自分を指さしてしまった。

それまで、ずっと我関せずの他人事として聞いていたアリスが、猫の耳みたいな頭の飾りを、ピクツと動かした。これ動くものだったのか。

「……柗貴くんは、わたしのパートナーです」

「え、ちよつとだけ。ちよつとだけ」

「却下します」

「柗貴は、あたしの幼馴染幼なじみなのに!」

「関係ありません」

「ひどいい!」

すくつ、とアリスが立ちあがる。

「……行きましようか、柗貴くん……もう話は終わりのようですし、わたしたちにできることもないでしょう」

「あ、ああ、しかし、ちよつと冷たくないかな。きみたち親友だろう?」

アリスが微笑ほほえみんだまま首をかしげた。

相変わらずだ。

シャーリーは子供が駄々をこねるみたいに、畳のうえでごろごろ転がっていた。  
須旺が、その転がっているシャーリーの頭に機械を乗せる。

水晶みたいな髪飾りだった。

「桜坂さくらがの授業以外での幻想具現化を禁止する——といっても幻想具現化グロウバライズやレベル制限する装置があるなら、こんな巨大な街を空に浮かべる必要はなかったわけだ」

「ん? 禁止されるだけで、使えちゃうの?」

「それだと罰が実施されてるか判らねえだろ。だから、この幻想禁止装置バンディアレククトを付けるんだ」

「なに?」

アリスが事もなげに言う。

「……爆弾ですよ。幻想具現化すると、大怪我します」  
 「うえっ!？」

須旺が肩をすくめた。

「この程度の大きさで幻想具現化を止めたり、レベルを制限できるなら、それは便利なんだがな。まあ、無理だから仕方ない」

「爆弾なんだ？」

シャーリーが邪魔そうに幻想禁止装置をつついた。

緑川先生が呆れた顔をして。

「桜坂、無理に楠木だけに拘る必要はないんじゃないか？ 他にも規律委員になりたいと思ってるヤツはいるぞ？」

シャーリーが思案するように天井を見つめた。

壁や壁は和風で統一されているが、天井だけは普通の教室と同じ発光パネルで穏やかに全面が光っている。

「相手が柎貴じゃなくても、規律委員の契約をしてパートナーができれば、コレ外れるんだよね」

「そうだぞ」

「でも、したら、あたしは柎貴のパートナーになれなくなっちゃうでしょ。いつか柎貴と一緒にやろうって言ってくれたとき」

アリスが首をかしげる。

「……必要なくなったのなら、その相手とパートナーを解消すればいいでしょう？」

「ダメだよ。そんなの、なんかひどいよ」

「……そうですか？」

アリスは本当に理解に苦しんでいる様子だった。

柎貴としては、シャーリーの義理堅さや優しさが貴いものに見える。でも、だからこそ、自分も今はアリスのパートナーとして、しっかりと役目を果たさないといけない。

「シャーリー、必要だと思ったら、ぼくに遠慮する必要ないから……たとえ、パートナーじゃないとしても、ぼくたちが昔からの友達であることに変わりはない」

「にははっ、そうだね！」

「さて、そろそろHRの時間だよ。教室へ行こうか」

柎貴はカバンを左手に持って立ちあがる。右手をシャーリーへと伸ばすと、ごろごろしていた彼女が掴まって、ひょいっと立ちあがった。

そのとき、委員会本部の鉄扉が開かれる。

「委員長！」

叫び声だった。

背の高い黒髪の女性が入ってくる。

いかにも仕事のできそうなキリツとした顔立ちで、墨を溶かしたような黒髪と白い肌と  
のコントラストが強い。

チェック柄のスカートをなびかせ。

カッカッ、と固い足運びが、その威勢を示していた。  
ハスキーボイスを張りあげる。

「須旺委員長、やっと学校に来てくれたんですね！ 仕事が山のように溜まっていますよ、  
今日は馬車馬のように働いてもらいます！」

「ちっ……お前か……俺は、これから用事があるんだ」

「またお菓子作りですよね!? それ趣味じゃないですか！ 悪いとは言いませんけど、  
ちゃんと仕事はしてくれませんか。そもそも規律委員会の委員長が出席日数不足って恥ず  
かしいじゃありませんか！ いくら授業免除とはいえ欠席すぎです！ 幻想具現者だか  
らって勉学をおろそかにしてもいいわけではないんですよ!」

「その話は何度も聞いてる」  
「聞いているなら、実行してください！ 具体的には学校に来てください！」

黒髪の女性は言葉こそ敵しいが、よほど須旺のことを大切に思っているのだらうな——  
と柎貴は感じた。

「あの女性は誰だい?」

「えっと、副委員長の理一遠也先輩だよ」

シャーリーが教えてくれた。

——遠也?

アリスが声を潜めて言う。

「……須旺礼時は学園でも知らぬ者なしというほど有名です。しかし、それと同じくらい  
有名なが、あの副委員長で、レベル3程度の雑魚ですが……《驚愕のレベル3》と評さ  
れています」

「驚愕?」

「……理一遠也は、あの容姿ですが……男子なのですよ、柎貴くん」

「そいつは驚愕だッ!!」

しかも、レベル3とは関係ない!?

緑川先生が「そろそろHRのチャイム鳴るぞー」とオレオをかじりながら言ったので、  
柎貴たちは委員会本部を出た。

——世の中には、いろいろな人がいるものだ。



エレベーターの中で。

「なあ、須旺先輩は強いから有名なかい?」

柗貴の問いに、シャーリーがうなずいた。

「そうだよ。細かい評価の数字が、この《楽園》で一番高いんだって」

「え？ それって学園最強ってことじゃ？ アリスとシャーリーが学園最強なんじゃ？」

「レベル7は、みんな最強って言われるからね！」

「……下らない物差しです。わたしの《妖精進撃》こそ至高であり、比較すら無意味だというのに」

アリスの自信家ぶりは、相変わらずだ。

彼女が強いのは間違いないと思うけれど、柗貴は興味があった。

「須旺先輩の特有幻想って、なにができるんだろう？」

「速いの！ ぶんっ、どかつ、びゅっって感じ」

「そ、そうか」

シャーリーの説明では、いまいわからなかった。

「きみより強いと思うかい？」

「ん、どうかなあ？ 勝負したことないからわかんない」

拮抗するほどの実力なのだろうか。彼女の特有幻想も、かなり常識外れに強い。それと同じくらいだとしても、相当なものだった。

アリスがエレベーターの階数を示す表示へと視線を向ける。

「……幻想具現者同士の戦いでは、相性や状況も重要ですから。そうしたものに影響され

にくい、というのは須旺の特有幻想の評価を高める要因になっているとは思いますが」

「ああ、なるほど」

「……わたしから柗貴くんに質問です。どうやら、あなたは須旺を知っている様子でした」

「そうだね、ぼくは三年前から須旺先輩を知っている」

「……………」

アリスが無言で話をうながした。

「隠すような理由じゃないよ。ある料理雑誌に取り上げられてたんだ。フランスの洋菓子のコンクールで、当時中学生だった須旺先輩が最優秀賞に選ばれたことがあったから」

「……なるほど……あの男なら、それくらいやりそうですね」

「素晴らしい腕前で、海外の有名な料理の学校からも声が掛かってたのに、幻想具現者だとわかって、この《楽園》に転校してしまったんだ」

小さなニュースだったが、柗貴にとってはショックだった。

彼のファンになっていたし、目標にしていたからだ。

アリスが小さく溜息をついた。

「……幻想具現者は高い集中力を持っており、芸術やスポーツの世界で結果を出している者も多いですから」

「そうらしいね」

「……ですが、特有幻想があると判明すると、それまでの実績も、まるで不当に手に入れたかのように扱われてしまいます」

「わかる気はするよ」

例えば、シャーリーは子供の頃から、やたらケンカが強くて大人相手にも負けなかった。無意識のうちに幻想具現化していたのではないかと――と枉費でも考える。

ケンカなんてルールはないようなものだから批判されたりはしないが……スポーツや芸術の世界では、アンフェアと判断されることもあるだろう。

その異能の存在が、本人の意志と関係ないとはいえ。



朝のHR――

梁谷に代わって、二年A組の担任は、別の男性になっていた。

教室からは、威昌沼の姿も消えている。彼は昏睡し続けており、今は休学扱いになっているらしい。違法なものと知ってA.P.P.D.を使つたうえ、故意に殺傷しようとしたのも明確なので、回復と同時に退学となる可能性もあるとか。

この《楽園》を退学処分になると、入学を拒否した者と同じで、別の隔離施設へと送られるという噂だ。そこがどんな場所かは、それこそ噂の域を出なかった。

担任が耳慣れないことを言う。

「今月は入れ替えがあった」

なんでも、成績が極端に上がったたり下がったりすると、クラスが替わるらしい。

新顔は女子が三名。

「初めまして、大井です。A組に上がって、すごく緊張しています。みなさんについてけるよう、がんばりますので、よろしく願います」

あとのふたりも順番に自己紹介をした。

仲良しグループといった感じか。

A組のクラスメイトたちが、ずいぶん驚いている様子だった。枉費には理由がわからなかったのだが……

七月頭の席替えで隣になった南島が、小さな声で話しかけてきた。

「二年になってから三ヶ月しか経ってないのに、三人も替わるなんて珍しいよね」

「そうなのかい？」

「うん。ふつうは、年に三、四人なのよ。それくらいレベルって変わりにくいものらしいから」

「なるほど」

南島は何度か威昌沼に絡まれていたようだが、今は陰りのない明るい表情を見せるようになっていた。

さらに声を小さくして彼女が言う。

「私、評価の数字が悪かったから、もしかしたら下のクラスに落ちるんじゃないかって心配してたの……残れてよかった」

「そうか。入れ替えてことは、下のクラスに行った人もいるのか」  
「うん」

見渡してみると――

威昌沼の仲間が三人いたが、その三人の席が入れ替わっていた。下のクラスになったのは彼らのようだ。

違法 A P P D は特有幻想を強くする効果があった。彼ら三人も使っていたのかもしれない。あるいは、違法行為に荷担していたことに対する罰なのかも。

なにかしら通常とは違う理由があって、例外的な人数の入れ替えがあったということかと柩貴は納得した。

HR は終わり、午前の授業が始まった。

空に浮いていようとも、幻想具現者が集まっていようとも、大半の授業は普通の学校と変わらない。

いささか退屈な講義が続き、テキストを暗記することと、ちよつとの理解が求められる。柩貴は料理やお茶にまつわることには詳しいが、それほど勉強が得意なわけではなかつた。

た。だいたい平均くらいだ。

今までは、落第しなければ充分、くらいに考えていたのだが……この学園に来てからは、できるだけ熱心に授業を受けている。そうする理由があった。

午前中、最後の授業は一般カリキュラムではなく、特別カリキュラム――幻想具現者のための授業だ。

二十四階の特別教室――昔のゲームセンターの筐体のような装置を前にして、ひたすら簡単な計算を解いたり、パズルのようなものをやったりする。

重要なのは、その計算やパズルの結果ではなく、機械が計測する集中力の度合いだった。特有幻想は、精神の集中によって発生する現象だと考えられている。ある種の訓練によって集中力を高めることにより、レベルを上げることが可能だとされていた。

もちろん他にも要素はあって、特別カリキュラムは多岐に及んでおり、それらは能力の種類ごとに分かれている。

例えば、シャーリーのように何かを撃つ《放射系》であれば、イメージを強化するため、そうした映像を見たり、銃を撃つてみたりするらしい。

アリスのような何かを出現させる《実体系》は、粘土細工やスイグルミを作ってみたりとはいえ、アリスが授業に出ているのは見たことがないが。

柩貴の場合は、類似例がなく《特殊系》と分類されているので、ひたすら基礎の繰り

返しだった。

パズルゲームをクリアする。

カラフルなパネルの並んだ画面に、集中力のスコアが表示された。

『10225ポイント』

いつもと変わらない。

「ふう……」

「わあ、すごいですね！」

「ん？」

振り向くと、女子が三人いた。

今日からA組に昇格した大井たちだ。

「10000ポイント超えなんて初めて見ました！」

「あ、ああ……珍しいらしいね。でも、シャーリーも同じくらいだよ」

「なになに、呼んだ？」

ちょうど彼女がやってきた。

大井たちが緊張したのがわかる。

そういうえば、シャーリーは規律委員としてアリスと《お助け猫》というチームを作って

いたが、あまりに被害が大きいものだから《地獄の猫》なんて渾名を付けられていた。

怖いイメージがあるのかもしれない。

話してみれば誤解だとわかると思うのだが。

「ぼくの出したパズルの成績を褒めてくれたから、シャーリーも同じくらいだよって話をしてんだ」

「ふうん。でも、数字なんて人それぞれでいいんじゃないの？」

「たしかに、比べても仕方ないね」

「みんな競争が好きだよねえ。そんなに周りを気にしなくていいと思うけどな」

大井が首をかしげる。

「そうなんですか？ レベル7の人って、もっと絶対に成績を上げてやるって感じなのかと思ってました」

「あたしは気にしないな。柢貫は覚醒したばかりだし……アリスなんか授業にも出てないもんねえ」

「アリスは二時間目のあと、ティータイムにします」とか言ってたな。そのまま帰ったんじゃないか？」

大井たちには、意外なようだった。

「どうして、それで成績が上がるんですか!? やっぱり、何か特別な食事とか!？」

シャーリーが思案顔をする。

「ごはん？ いつも美味しいと思うもの食べてるよ。ああ、お腹減ってきちゃったあ」

柢貫はうなずく。

「食事は大切だけど……特有幻想<sup>ディレクト</sup>には関係ないんじゃないかな」

「にははっ、アリスなんか少ししか食べないし、授業は受けてないし。それでも、どんどん強くなってるみたいだもんね。あんまり関係ないよね」

「そうかもしれない。でもぼくはちゃんと授業を受けるつもりだけどね」

「ねえ、柎貴<sup>まじめ</sup>って、そんな真面目に勉強するほうだったっけ？」  
「いいや、と首を横に振った。」

「こんなにも熱心に授業を受けるようになったのは《楽園<sup>カナル</sup>》に来てからだ。けれども、べつに成績を上げたいわけではない。」

「この学園<sup>カナル</sup>では、レベル7<sup>7</sup>でただけで評価が高いし、勉強しなくても進学できちゃうし、規律委員だと授業さえ免除されるだろう？　そうやって優遇される立場だからこそ、周りより真面目にやっつけないと、能力を笠に身勝手に振る舞っているように見えるじゃないか」

「それ、アリスのこと？」

「あ、いや……まあ、彼女の場合、身勝手に振る舞うことを公言してるからな……ぼくが言っただけで、直してくれるとは思えないし」

「にははっ、変わらないと思うよ」

「仕方ないな。真面目にやろうっていうのは、ぼくの考え方であって、周りの人に強制することじゃない」

肩をすくめると、シャーリーが笑い声をあげた。

大井が真剣な顔をしてうなづく。

「つまり、自然体が大事ってことですね！」

「え？　まあ、そうかもしれないね」

他のふたりが小さな声で言葉を交わす。

「すごい。わたしら、レベル7の人たちと話しちゃってるの」

「本当だねえ」

ささやかに盛り上がっていた。

なんだか、くすぐったく感じてしまう柎貴だった。



授業を終えて、昼休みになった。

みんなと特別教室から二年A組へと戻る。

廊下に人影があった。

大井たち三人へと話しかける。

「ちょっといいかしら？」

黒髪を短く切りそろえた勇ましい雰囲気の子だった。

眉の濃さから、意志の強そうな印象を受ける。彼女は環端末からウィンドウを開いた。

空中に浮き上がる立体映像。

左腕に填められた銀色の機械は、ただの腕輪のようにしか見えないが、通信したり立体映像を出したり各種情報にアクセスしたりと、いろいろな便利な機能を持っている。

今は彼女の身分証を表示していた。

『規律委員会支援隊 氷梨勇香 2・ZE』

柾貴は転入してきた初日に、ケガを手当てしてもらったことを思い出す。

特有幻想のレベルが低くて規律委員にはなれないが、学園を大切に思っており、仕事熱心な少女だった。規則違反者に相対する前衛を補佐する支援隊と言う役職を真摯にこなしている。

大井が怪訝な顔をした。

「なに？」

「規律委員会の氷梨よ。訊きたいことがあるの」

「あなたZE組？ ほとんど一般人と同じ無能力者じゃない」

先程の柾貴たちへの対応と違って、大井たちは露骨に軽んじた視線を送る。

違和感を持つものの、彼女たちの態度は《楽園》のなかでは普通らしい。ここではレベルが重視される。

そうした大井たちの態度に動じず、氷梨が話を切り出す。

「先月から急激に特有幻想の評価値が伸びている生徒がいるの、大井さんたちのように。なにか思い当たる理由はある？」

「はあ？ そんなの努力よ。努力してるから」

大井が突っぱねる。

後のふたりが顔を見合わせて「やっぱり、アレが……？」と言葉を交わすが、はっきりとした理由の説明はなかった。

「ははあん、規律委員の仕事ってことにして、レベルアップの秘訣を知りたいわけ？」

「いえ、そういうわけじゃないわ。すこし前に、レベルアップするAPPDの事件があったから念のために調査してるだけで」

「そんなもの、やってないわよ！」

「あ、ごめんなさい……そういう意味じゃないから」

「変なことはやってないわよ。レベルアップの努力なら誰だっしてしてるでしょ。この学園じゃ、レベルが全てなんだから。あなた、評価最低のZE組みたいだけど……規律委員会の仕事を頑張るより、特有幻想を鍛えたほうがいいんじゃないの？」

「ぐっ」

氷梨が言葉を詰まらせた。

シャーリーが何かを言おうとする。

しかし、柗貴は制止した。

まだ学園の風習に不慣れな柗貴だが、それでも水梨の立場は理解しているつもりだ。

彼女は、これくらいの言葉を浴びせられるのは覚悟のうえで、それでもA組に調査に来たはず。シャーリーに助けられるのは本意ではなからう、と思つた。

気を取り直した水梨が、「別件になるのだけれど——」と環端末リングキアを操作して誰かの写真を表示する。

「三年A組の先輩なんだけど……知ってる？」

「ううん」

「数日前から様子がおかしくなって」

「知らないって！」

大井が声を荒らげた。

これ以上の聞き取りは無理と判断したのだから、水梨が頭を下げる。

「調査への協力、ありがとう。なにか気付いたことがあれば、規律委員会レイカまで知らせてちょうだい」

「はいはい……あなたもさ、レベルアップした人を疑うよりも、自分がレベルアップするよう努力したほうがいいんじゃない？」

そう言うと、大井は仲間を連れて教室へと入っていった。

「……ふう」

水梨が環端末リングキアからウィンドウを出して、名簿に印をつける。

どうやら、ここ最近で急激にレベルアップした生徒のリストのようだ。もう大半の名前にチェックが入っていた。それだけ調査したということか。

柗貴は片手を挙げて。

「やあ、熱心だね」

「あ、楠木くん……あと、桜坂さくらざかさんも」

「おひさしぶり！」

「その調査は緑川先生の指示かい？」

「許可は取ってるけど、自分が気になったからなの。先日さきじつの報告を読んだ直後に、おかしなくらいレベルアップした生徒がいて……なにかあるんじゃないか、って」

「そうだったのか。さっきの三年の先輩も？」

顔写真を見せて訊いていた。

水梨が首を横に振る。

「あれは別件。ここ数日で何人か、様子がおかしくなってる。って報告しよほうがあったから、合わせて聞きこみしてるの」

「様子が？」

「うん。なんて言ったらいいか……心ここにあらざというか……ぼーっとしてるらしいわ。あ、もうこんな時間。ごめんなさい、お昼休みなのに」

「かまわないけど……」  
シャーリーが手を叩く。

「じゃあ、いっしょに食べようよ！」  
「えっ!？」

水梨が顔を引きつらせた。

そういえば、彼女も《お助け猫》<sup>ヘルプキャット</sup>に悪い印象を持っているほうだったか。  
いい機会だから、少しでも払拭できれば、と柗貴は思う。

「そうだな。水梨さんさえよければ、どうだろう？　ちょうど三人分のお弁当があるんだ」

「三人分？」

「アリスのだったけど、帰っちゃったみたいだから」

「そう。残すのもつたいないわね……でも、私なんかじゃ……」

シャーリーが水梨の肩をつかんだ。

「なんかじゃないよ。規律委員会の仲間じゃん！」

「えっ、でも……」

「食事しながら詳しいことを聞けると助かるよ。それは、ぼくも気になるからね」

水梨は逡巡していたが、うなずいた。

「……そういうことなら……私でよければ」

シャーリーが袖を引っぱってくる。

「じゃあ、早く行こ！　お腹へっちゃった！　早く！　早く！」

彼女に急かされ、柗貴は教室に戻って弁当箱を持ち出すと——三人で最上階にある展望フロアへと向かった。

最近、弁当を用意して見晴らしのいい席で昼食をとるのが日課となっている。



水梨<sup>こおりゆうか</sup>は緊張していた。

——お呼ばれしてしまったわ。

同じ規律委員でも、自分のようなレベル1でZ E組で支援隊の末端と、楠木くんや桜坂さんのようなレベル7でA組でチームの人とでは、まるで別組織だ。

世界が違う。

周りからの扱いも。

おそらくは、見えている景色も違うと思う。

だから、水梨はA組に調査に行っても、楠木くんたちが自分に関心を持つことなどないだろう——と考えていた。

まさか、一緒に食事をすることになるなんて！

大人気の展望フロアは、すでに大勢の生徒たちで混雑していた。桜坂さんが指さす。

「あ、いつもの席、空いてるよ。よかったね」

そこは森林公園の木々と湖の向こうに、巨大な管理塔を眺めるという特等席だった。ぼっかり、ひとつの半円テーブルだけが、忘れ去られたように空いている。

無邪気に喜んでる桜坂さんと、申し訳なさそうな楠木くん。

当然、周りの生徒たちは知ってて使っていないのだから——学園最強のチームが、いつも座っている席なんて。

ただでさえ、この一角は三年生の高レベルの生徒たちばかりで、近寄りたがたい雰囲気があった。

そんな注目を集める席にお呼ばれしてしまった自分。

周りでは「誰だろう?」「転校生?」「新しいレベル?」なんて、ささやき声が出ている。

水梨は場違い感到に身が縮む思いだった。

——すみません。レベル1です。もう一年以上《第十三校舍》にいます。

弁当箱がテーブルに置かれる。

「口に合うといいんだけど」

「もしかして、楠木くんの手作りなの?」

「うん」

蓋が取られた。

「えっ!? すごい豪華!」

サラダにローストチキンに卵焼きに肉巻きトマトにロールキャベツにハムサンドに……全部で十品くらいある。

量も五人か六人分くらい!?

どれも形が整っていて、一流レストランのお弁当と違って、こんな感じだと思う。

いつも菓子パンと牛乳で済ませてる水梨の昼食とは比べようもなかった。

桜坂さんが「いただきますあゝはんぐっ! はんぐんぐ!」と凄い勢いで食べはじめた。量については訂正しよう。二人分と桜坂さんの分という感じだ。

「よかったら食べてみて」

「あ、うん」

楠木くんに勧められ、水梨はサンドイッチをつまんだ。お弁当箱に入っていたのに、パンがばさつきも、ぐしょぐしょにもなっていない。

食べてみると程よい塩気があり、口のなかでハムと卵がとろける。

——やばい。

ときどき食べてる三個三〇〇JDのビニールに包まれたサンドイッチが食べられなくなりそう。

いつものがサンドイッチなら、これはサンドイッチ様という感じだった。  
「美味しい！ これを楠木くんが作ったの!？」

「ああ……」

「すごいでしょ!? 柗貴は料理が上手なんだよお」

桜坂さんが答えて、彼は照れるばかりだった。

「本当に美味しい」

「そ、そうかな……ありがとう」

桜坂さんが、もしかもしゃとロールキャベツを食べながら。

「柗貴は朝とか晩も作ってくれるんだけど、それもすごく美味しいんだよ」

「えっ!?! 朝食も……?！」

「うん。いつもアリスと三人で食べてんの」

彼女の言葉に、楠木くんが苦笑して付け足す。

「シャーリーが寝坊しなかったときは、だけどね」

「にははっ」

「……………そ、そう」

朝食!? 寝坊!? つまり、二人は……あ、いや、楠木くんと、桜坂さんと、クロック

ハートさんは、同棲してることなの!?!

いや、三人の場合は、同居というのだろうか？

まだ学生なのに問題ないのだろうか？

あれこれ考えて、頬が熱くなって、頭がぼおっとなってしまう氷梨だった。

「ふしゅう……」

ぬうつ、と氷梨の背後から、手が伸びてきた。

卵焼きを掴み取る。

「なっ!？」

あわてて振り返ると、すぐ後ろに男が立っていた。

口に卵焼きを放りこむ。

黒髪をオールバックにして、制服をラフに着崩している。悪ふざけで卵焼きを取って  
いったわけではないのだろうか。

真剣な顔つきで咀嚼する。

須旺礼時だった。

「委員長!？」

氷梨は思わず声をあげてしまったが、彼は無反応で、何かを考えこむようにして。

「……………ふむ……甘いな」

「うっ」

楠木くんが小さくうめいた。  
 なんと須旺先輩が氷梨の隣の椅子いすに腰掛けてくる。

「食べてみる」

差し出された弁当には、卵焼きが入っていた。

楠木くんが震える指で――

その前に、桜坂さんがつまみ取って行く。

「もらい！ はぐっ！」

「ぬっ……桜坂も食べるのかよ。まあ、いいけどな……おい、お前らも食べてみる」

楠木くんだけでなく自分も勧められているらしい、と氷梨は気付いた。

――委員長の料理を!?

須旺先輩が料理人として評価されているのは有名だ。幻想具現者グロイバライザーになってからは、国際的なコンクールとは無縁だが、もくもくと食べているお弁当の美味しそうなこと。

様子に気付いた周りの高レベルな三年生たちが、ざわつきはじめた。

楠木くんと同じか、それ以上に氷梨は緊張してしまう。

「えっと……い、いただきます」

「うむ」

フォークの先が震える。

卵焼きをもらって、口に入れた。

舌のうえに広がる卵の風味と甘味と、ほのかな出汁だしの香り。甘いけれども、お菓子のよ  
 うな露骨さではなく控えめで上品に感じられた。外側は固めでしっかりしているのに、内  
 側からトロリとこぼれてくる。半熟卵がお弁当で楽しめるなんて、すごいと思う。

「お、美味しい」

思わず氷梨は素直な感想をこぼしていた。

楠木くんが真剣な顔をしている。

「……出汁も、焼き加減も、ぜんぜん違う……それに、溶き加減も」

須旺先輩がうなづく。

「まあ、料理に正解はないけどな」

「でも……ぼくは、これが作れるようになりたいです」

「そうか。お前も料理するのか」

「はい！ あ、はい。これ、作ってみたんですけど……」

楠木くんが箱を出した。マドレーヌだ。あれも手作りなのか。

須旺先輩だけでなく、同席している氷梨たちにも振る舞われた。

桜坂さんが嬉うれしそうにつまむ。あんなにいっぱい食べているのに、お腹は苦しくないの  
 だろうか。

だろ

なんにしても、すごく贅ぜいたく沢な昼食になった。

「いただきます」

水梨は一個マドレーヌをもらう。  
 やわらかい歯ごたえと、しっとり口のなかに広がる甘味。  
 すっきりしたアイスティーが欲しくなる。  
 須旺先輩が小さくうなずいた。

「悪くない」

「あ、ありがとうございます！」

「残念ながら、この味に相応しい紅茶は、学食にはないけどな」

ニコリともしないから気に入らなかつたのかと思つたが、そもそも須旺先輩は笑わない人なのでわからなかつた。

楠木くんが授業を受けてるときみたいに真剣な顔をしてうなずいている。

桜坂さんが黙々と食べまくる。

水梨は沈黙。

雰囲気为重たい。

こんなに美味しい物を食べているのに——と水梨は思う。適当に話題を探した。

「あ……お菓子といえば、最近できたケーキ屋さんが評判いいらしいですね」

「ケーキ屋さん？　なんてお店だい？」

「美味しいのか？　食べたか？」

予想以上にリアクションがあつた。完全に雑談のつもりだったので、思わず水梨は焦っ

てしまふ。

「え、えっと……《カフェ・ド・マンショ》って行って、私は行ったことないんですけど、美味しいらしいです。そのケーキを食べると願いが叶うとか、恋人ができるとか、いろいろ噂があるみたいですね」

自分で言っておいて、ちよつと胡散臭いなあ、と思つた。

須旺先輩が怪訝な顔をする。

「噂だと？」

「願いが叶う、とか……？」

楠木くんが考えこむ。

桜坂さんだけは相変わらず食べるのに全力だった。

水梨は確認する。

「レベルが上がるなんて噂もあるらしいですよ。この《樂園》では、その手の噂話は、いくらでもありますけど……調べてみたほうがいいでしょうか？」

「そうだな」

「うん、そう聞いたら行かないとね」

「そうですね。いつもなら、よくある噂って思うところですけど、気になることがあつたら調査したほうがいいですよね」

須旺先輩が首を横に振る。

「噂なんぞ、どうでもいい。ケーキが美味しいというなら、食べておかないとな。当然のことだ」

「食べてみたいですよね」

楠木くんも味のほうが気になるようだ。

氷梨は眉間みげんに力を入れてしまう。

「えっと……あの……願いが叶うとかの噂は、気にならないんですか？」

須旺先輩が肩をすくめた。  
興味なさそうだ。

「下らんな。靴紐くつひもの色だの、鏡の向きだの、朝食のメニューだの、願いが叶うだの何だのと。いちいち付き合っていられるか」

「ぼくは、噂の調査も大切だと思うけど……やっぱり、ケーキの味のほうが気になっちゃうかな」

楠木くんが申し訳なさそうにしつつ、頬をかいた。

桜坂さんが両手を挙げる。

「美味しいケーキなら、食べたいよね！」

「……………そう、ね」

釈然しやくぜんとしない思いを抱えつつ、氷梨はうなづく。

規律委員会レイギイカの委員長とエース級のレベル7たちが揃まぎって、怪しい噂話よりもケーキの味

のほうが気になる、と断言されてしまうと……

いささか不安を覚えてしまう。

もしかして、この場で規律委員会レイギイカの仕事に熱心なのは自分だけなのだろうか？

——私、ズレてるのかな？



最後まで立ち読みしてくれて  
どうもありがとう！  
続きは本で楽しんでね！